

## ② 外国人児童生徒と教育

■小林一彦

### 1 はじめに

現在、横浜市には韓国・朝鮮人約一万五千人をはじめとして世界百二十数カ国から約四万七千人の外国人が在住しております。横浜市立の学校に通う外国人児童生徒は、韓国・朝鮮人をはじめ中国・ベトナム・フィリピンなどアジア諸国、ブラジル・ペルーなど南米諸国からの転入も年々増えてきました。その内、韓国・朝鮮人児童生徒は四割を占めています。今後ますます多くの外国からの子どもたちが、横浜の学校で日本の子どもたちと共に学ぶものと思われれます。

### 2 在日外国人の子どもたちの自立と悩み

#### ① 通称名で通う現実

市立学校に通う外国人児童生徒のうち、本名ではなく日本名<sup>1</sup>通称名を使用している児童生徒は、小学校で七四%、中学校で八一%おり、その殆どが在日韓国・朝鮮人です。この現実、通称名にせざるを得ない状況が、

私たち日本人社会の中にあることを示しています。

多くの場合、子どもたちは、生活の中で、民族への偏見を実感したり、親から被差別の体験を聞かされていて、なかなか本名を出せません。韓国・朝鮮人であることが分かっしまわらないか、いつもびくびくしたり、本名を名のと友達がみんな離れていって孤立してしまわれないかと悩みます。それは、ある二世の保護者の次のような話からも分かります。「私は大学二年生の時から本名を名のようになった。それまでは通称名だったが、朝鮮国籍であることは周囲の人たちは知っていたようだ。本名を名のるまでには、差別発言を受けたり、同和問題や歴史の授業で朝鮮のことを学習する日は欠席したり、受験票に書かれた本名を友達に見られるのを恐れたり、平坦な道のみでなかった。しかし大学で韓国人のサークルに入り、他の人たちと触れることにより考え方が変わってきた。それは、本名を知られることのつらさより、隠すことのつらさに耐えられなくなったからだ」

通称名を使うということは、民族を隠し、ありのままの自分を出せないことです。本名を名のることは、差別にさらされることにもなりかねません。例えば、名前のことから

かわれたり、いじめを受けたりします。そのため傷つき、心を閉ざし、時には不登校に追いやられます。これから迎える進学や就職のとき、あるいは結婚のとき差別を受けはしないかと、自分の将来に不安を感じたりします。人生の重大事である「働く、結婚する」時に受ける差別で、在日の若者が生きる希望をどれほど削がれていることでしょうか。社会に根強く残る民族に対する偏見・差別、社会保障・国籍条項・参政権などさまざまな課題の中で、在日として自立して生きていくための悩みや不安を秘めて、在日外国人の児童生徒は通学しているのです。

#### ② 在日としてのアイデンティティの悩み

通称名か本名かの問題は、単に「呼び名」を変えろということではなく、差別にかかわる問題であり、在日としての生き方にかかわった問題です。帰化を含めた「同化」と民族性を保持しようとする「異化」との間を揺れ動く、アイデンティティの問題です。世代交代が進む中で、それへの姿勢は、多様化しております。ある中学生が人権作文で、このように述べています。

「私は在日韓国人です。しかも日本で生まれ育ち、韓国へ行ったこともなければ、言葉も

1 はじめに  
2 在日外国人の子どもたちの自立と悩み  
3 「内なる国際化」と民族共生を目指す教育の課題  
4 おわりに

しゃべれない在日韓国人です。朝鮮が日本の植民地だった時に、祖父母は日本に連れてこられたということですが、私自身は「韓国人」であるということ自体に、実感がわきません。

祖国や民族についてとりたてて意識したこと

もないのです。ごく自然に受けとめていたのです。ですが、私には唯一、韓国人であるという証明があります。それは、私の名前です。

(中略) 弟は小学校一年生の時に、一番仲の良い友達に自分が韓国人であることを打ち明けたそうです。相手はすかさず「それなら帰ればいいじゃん」と言ったそうです。こういう言葉には、やりきれない寂しさ、口惜しさを感じます。私も弟も自分が名のらなければ、人は日本人だと思ってしまう。それ位自然に生活していますし、とけ込んでいました。これが本当にいいのは疑問です。私は韓国人です。これからずっと日本で生活していくことになっても、私は韓国人です。日本の中で韓国人として生きていくわけです。私が韓国人であることは、これから高校や大学、社会生活へ進むにつれて自分がどう生きていくかについての大きなポイントになってゆくだろうと思います。(以下略)

このように、日本に生まれ、日本の学校と生活文化の中で育ち、これからはずっと日本で暮らすであろう三世・四世の児童生徒が、「在日」としてどのように生きていくのか、まさに自らのアイデンティティを求めて葛藤します。周囲のおとなや子どもたちの無知や偏見によって、心を傷つけられ、「在日」に

生まれたことに誇りをもてず、民族に対してマイナスのイメージをもたされたりします。

また、そのような偏見・差別の体験を乗り越えて、韓国・朝鮮人としての自覚と誇りを取り戻していくこともあります。

### ③「ニューカマー」の子どもたち

一九七〇～九〇年代にかけて、中国帰国者、アジアからの難民や就労者、南米から日系人の就労者等の増加により、横浜市立学校でも「ニューカマー」と呼ばれる在日外国人の子

どもたちが増加し、在日外国人児童生徒の半数を超えています。そして、多くの場合、親も子どもたちも日本語がほとんどできません。

市立学校では「国際教室」や「日本語教室」を設け、日本語教育・日本文化の学習・生活指導などを行っているのですが、ここでもやはり子どもたちは自立に悩み、また、同化と異化の間で揺れるのです。まず、「ことばの壁」に悩みます。「小学校の二・三年生ぐら

いまでぜんぜん先生の言っていることが分からなかった。だから、勉強も全然分からなかった。連絡帳も写すだけで意味が分からないから、ずっと忘れ物をしていた。」これは、ある市立中学校の教師が集めた生徒の声です。

それでもやがて、当初の「ピアスをして登校する」とか「授業中むやみに歩き回る」といったこともなくなり、日常会話としての日本語には不自由しなくなりますが、教科の日本語が不十分なため教科学習についていけなかったり、学習意欲をなくしたり、高校入試など進路については大きな困難と不安を抱えます。

また、言葉の問題は学習上の問題にとどまらず、子どもたちのアイデンティティと関連

します。日本語を習得する一方で、母国語は確実に忘れていきます。だから日本語がほとんど話せない親とはコミュニケーションがうすれ、生活習慣やものの考え方についても親子間のトラブルも起こります。

しかも、子どもたちにとって、「日本化する

こと」はある意味で自己喪失につながります。次の声はそれを端的に示しています。

「たくさんのことを中学校で学びましたが、僕は何かを失っているような気がしています。素直さ、まじめさ、そしてベトナム人であることが薄れていくような気がします」

母国のように率直な物言いをすると「日本的でない」と疎外され、逆に日本の習慣に合わせる努力をすると、こんどは「自分らしさ」の喪失を経験するのです。

「ニューカマー」の子どもたちも「オールドカマー」と呼ばれる在日韓国・朝鮮人の子どもたちも「二つの文化を内在して、より充実したアイデンティティをもつ存在」であり、地域社会を築く一員として共に存在することが、日本の文化をより豊かにすることであるという視野が必要です。また、それは学校、教師、学級の子どもたち、保護者、地域住民みんなに求められているのではないのでしょうか。

### 3 「内なる国際化」と民族共生を

#### 目指す教育の課題

#### ① 内なる国際化

戦後五十年を経て、日本の国際化が叫ばれ、さまざまな国々との共生が求められています。

また、在日外国人とりわけ韓国・朝鮮人の歴史を踏まえ、内なる国際化の具体化が求められています。

しかし、日本人には、いまだにアジアに対して偏見と差別の意識が残っています。子どものけんかの時に、「○○人は、○○へ帰れ」などと偏見に満ちた「差別発言」が飛び出すことがあります。大人の世代の偏見と差別意識が、子どもの中に受け継がれているのでしよう。

内なる国際化とは、私たちの身近にいる在日韓国・朝鮮人をはじめとする外国人を外国人として認め、国籍・民族の違いを認め合い、自立と共生の人間関係を確立することです。この内なる国際化の実現が、真の意味での国際化の要となります。

## ② 市立学校における共生を目指す教育

現在、横浜市立学校で、韓国・朝鮮人をはじめ、中国・ブラジル・ベトナム・ペルーなど約四十カ国二千人以上の児童生徒が日本人児童生徒と共に学んでいます。子どもたちが、お互いの存在と意見を認め合い、協力し合う関係を学校の中に創りだしていくことは、お互いの心を豊かにしていきます。

外国人の子どもたちが自分の民族や文化に誇りと自覚をもち、たくましく生きていく力を身に付け、また、日本人の子どもたちが外国の文化や伝統を理解し、文化を共有することにより、国際性豊かな人間として開かれた心をもつこと、人間として個性を認め合い、支え合って共に学び、共に生きる社会を築くことは、日本の国際化にはどうしても必要な

課題といえます。

横浜市では、市内の小・中学校で在日韓国・朝鮮人に対する差別発言や差別事件などが起きました。これらの差別事件の背景には、人権尊重に対する認識や民族に関する歴史認識の不足、そして、潜在的な民族差別意識の存在を認めざるを得ません。そこで、横浜市教育委員会は民族差別の解消と共生の教育をめざして、平成三(一九九一)年に「外国人(主として韓国・朝鮮人)にかかわる教育の基本方針」を制定しました。民族差別の解消と民族共生を目指す教育の創造は国際化の課題であり、在日外国人の問題は日本人の問題でもあります。

「方針」では、歴史への反省と歴史・文化の正しい理解等を通じて、(1)日本の子どもたちに、開かれた心をもって民族共生の感性と態度を育てること。(2)在日外国人の子どもたちには、自分を隠さず、民族の誇りをもって自立していくよう励ますこと。(3)教職員は、在日外国人の子どもや保護者の思いと願いを自分のものとして子どもたちの教育を考えていけるよう、自己変革すること、等を掲げています。

## 4 おわりに

二十一世紀は「人権の世紀」といわれます。ここ二、三年の間に「児童の権利に関する条約」の国内発効、「国連人権教育の十年」の開始、「人種差別撤廃条約」の批准など、基本的人権の確立を求める潮流の高まりの中で、横浜市は国際文化都市を目指して「ゆめはま

2010プラン」の具現化に努めています。それには、日本人も在日外国人も地域社会を築く同じ一員として、違つて当たり前の視点をもって、互いに異なる価値観や行動様式を認め合い、豊かな国際性を身に付けることが必要です。特に、教育の果たす役割は大きく、横浜の子どもたちに「在日外国人の子どもたちが共に生きる仲間である」という感性を培う教育が極めて大切です。また、このような意識の変革は、対外国人に限らず、人間を独自の人格、アイデンティティ、自己実現の欲求をもった存在としてみる人間理解につながるものであり、人間としての尊厳が守られる地域社会の実現を目指す営みでもあると思います。△教育委員会人権教育担当指導主事▽

### 「在日外国人(主として韓国・朝鮮人)にかかわる教育の基本方針」の概略 平成3(1991)年 横浜市教育委員会制定

- 1 教育の課題
  - ・国際文化都市を目指して～内なる国際化の課題
  - ・内なる国際化と民族共生をめざす教育
- 2 歴史の反省
  - ・植民地支配と同化教育への反省
    - 韓国・朝鮮人が来往した歴史、関東大震災における朝鮮人虐殺名前や言葉を奪う同化政策、戦後の民族教育、偏見と差別の現実
- 3 教育の創造
  - ・心を開く
    - 日本人の子どもたちに民族共生の感性を
    - 在日外国人の子どもたちに母国・民族の誇りを
  - ・歴史と文化に学ぶ
    - 過去の反省にたった正しい歴史認識を
    - 在日韓国・朝鮮人の歴史、名前の学習、
    - 韓国・朝鮮の歴史・生活・文化、日本と韓国・朝鮮との交流史
  - ・共に歩む
    - 教職員の自己変革～在日外国人の思いや願いを自分のものとして
    - 在籍する子どもたちの教育を
- 4 教育環境の整備
  - ・学校の役割、教育行政の役割
    - 在日外国人と日本人児童生徒との相互敬愛・理解・協力
    - 民族共生の実現をめざす教育、在日外国人の思いと願いを聞く、
    - 交流促進、就学・進路保障、在日外国人採用、教職員研修研究
    - 母国語や母国文化の学習機会、市民啓発、共生社会の創造